



正装した高木繁大尉



家族とともに（昭和5・6年頃）

ミニ特集

高木繁副所長のあれこれ

去る8月26日徳島城博物館で、「徳島におけるドイツ 2006」の協賛事業の一つとして、「徳島・板東俘虜収容所長松江豊寿の実相を求めて」というフォーラムが開かれました。参加者は70名ほどでしたが、地元ばかりでなく岡山や高知から来られた講師やパネラーの報告と参加者の熱心な質問が相まって、活気のある有意義な会になりました。

その席でもある報告者から、松江所長ばかりでなく、ドイツ兵の間でも人気が高かった高木副所長にもっと注目してはとの発言がありました。

あらためて『ディ・バラック』にも当たってみました。松江の名が出てくるのは4回ですが、高木は10回も出てきます。ことに所内の様子を俘虜どうしの交換などを通してユーモラスに描いた「収容所漫筆」に、6回もの記述があります。回数を制限されていた郵便に余裕を与えたり、みんなが関心を持っていた俘虜交換とか大阪への移転などの問合せ先になったり、時には小さな高木が、ミスをした大きなドイツ兵に制裁を加えようとしたが届かず失笑を買うなど、巧みなドイツ語と人柄を生かしてドイツ兵と身近に接していた様子うかがえます。

今回の企画を前に、たまたま高木副所長の孫に当たる三男利男さんのご子息康男さんが、丸亀の『メール会報』に連絡をくださいました。担当の小阪清行さんが横浜で会われるなど交流を深め、その経過や手に入った情報をまとめてくださいました。また8月初めに副所長の次男弘司さんの奥様和子さんが、息子さんなど一族8人でドイツ館に来られました。小さい子の一人が展示室の高木さんの写真を見て、映画の人（国村準さん）とそっくりと言いつつ大笑いしました。その和子さんにも原稿を頼みましたところ、自分より詳しいからと三男利男さんをお願いしてくださいました。

まだまだ十分とは言えませんが、これまではっきりしなかったことや思いがけない情報も出てきます。お楽しみください。

高木繁に関する覚書

小阪 清行

松江豊寿と比較して、高木繁については不明の点が極めて多い。限られた情報源から、比較的信頼に値すると思われる点を列挙してみたい。

高木繁には妻理久(りく)(徳島の足袋屋の次女)との間に四人の子供がいた。長男頼夫(ヒデオ)、次男弘司(故人)、長女サカエ(故人)、三男利男の四氏である。以下の情報は、利男氏の長男康男氏から得たものが多い。

高木繁(1886[明治19]~1953[昭和28])。父高木寄生二郎(きせじろう)、母チセ。父親は海軍の主計官をしていた。出生地、丸亀市。三男利男氏の記憶によれば、本籍地は丸亀市中府町463の1(ひょっとすると10?)で、現城乾小学校のすぐ側だった。

繁は陸軍大阪地方幼年学校に進み、陸軍士官学校を卒業したが、特に語学に秀で、ドイツ語をはじめ、英語、ロシア語、中国語など7ヶ国語に通じていたことは周知の通りである。

松江所長とともに徳島収容所に赴任したときは陸軍中尉だったが、徳島時代の大正5(1916)年5月2日付で大尉に昇進し(川上三郎氏からの情報)、板東収容所で松江の副官となった(当時31歳)。それ以後の高木の経歴は、瀬戸武彦氏の名簿によれば、以下の通りである(瀬戸氏によれば、この記述の主な情報源は、繁の次男弘司氏へのインタビューに基づく、2000年5月22日付の読売新聞徳島版の記事である)。

「板東収容所閉鎖後は福山連隊等を経て、1929年に陸軍中佐で退役した。退役後は兵庫県外事課、ドイツ系のバイエル薬品勤務を経て、1935年満州のハルピンに渡った。外資系の百貨店秋林洋行に勤務し、日中ソ間の情報戦に従事したとも言われる。終戦後、ソ連軍によってシベリアのバイカル湖東方のチタに抑留され、最後はスベンドロフスク州(正しくはスヤンドロフスク州)アザンの病院で病没したとされている」。

康男氏が靖國神社に問い合わせたところ、以下のような回答があったが、これによって上記の内容がほぼ正しかったことが証明されたとと言えるかもしれない。



丸亀市法音寺の高木家墓

- 一、階級：準軍属特別未帰還者邦人
 - 二、所属部隊：浜江省哈爾濱市ハルビン特務機関
 - 三、死歿年月日：昭和二十八年四月三十日
 - 四、死歿場所：ソビエト連邦スヤンドロフスク州アザン病院
 - 五、死歿時本籍地：兵庫県尼崎市西字荻ノ戸五三九ノ一
 - 六、死歿時御遺族：(妻) 高木 りく
 - 七、合祀年月日：昭和四十八年十月十七日
- 繁の先祖についても記しておきたい。

1658(万治元)年に播州龍野より丸亀に移り住んだ先祖高木左介(佐「助」と書かれた史料もある)が住んでいた屋敷跡は、「丸亀ドイツ兵俘虜研究会」の嶋田典人氏によって、掛軸「元禄四年丸亀町家之図」に基づいてほぼ確認されている。県立丸亀高校の南東角付近である。なお、康男氏からの情報では、高木家の石高は三百石であった。

高木家の菩提寺である法音寺は丸亀市南条町4にあり、浄土宗禅林光明兩寺の末寺である。丸亀市観光協会のHPによれば同寺は「京極高和公に従い、兵庫県龍野市から丸亀に移り、延宝2(1674)年に創立された。(中略)墓地には、文学の井上通女・三田義勝・巖村南里、俳諧の齋田五蕉、砲術の赤羽奎之進、医術の三田耕亭や勤皇家土肥大作、大阪屋黒瀬家等の墓碑がある」。すなわち丸亀では名利とされている。

高木家の墓石に刻まれた文字は以下の通りである。

左側面：延寶二年以降先祖代々 大正四年四月建之高木寄生二郎

右側面：元祖高木佐介萬治元年正月 京極高和公丸亀城主二移封 二付龍野ヨリ隨ヒ来る

かなり以前、墓の墓地内移転の際に住職が確認したところ、墓の中に遺骨は全然入っていなかったとのことである。ソ連から遺骨が帰っていないので、当然のことながらも、繁も父親が建てたこの墓に眠ってはいない。

父の思い出

三男 高木 利男

思いつくままに、つれづれ草風になりましたが私の記憶を記してみました。

- ① 昭和初年ごろ(私が幼稚園のころ)、兄弟3人が横一列に並ばされて父の教練を受けたことがあります。今なら、ダンゴ3兄弟と言ったところですよ。番号の1, 2, 3は、ドイツ語のアインス・ツヴァイ・ドライで、当時の高等学校の寮歌の始めの様なものでした。敬礼も、陸軍式に指をそろえる様に教えられました。
- ② 父は昭和7年に兵庫県(外事課)を退職し、満州ハルピンの秋林(チューリン)洋行という商社へ赴任しました。社長はドイツ人で、多くのロシア人、中国人の中に日本人は少数で、言葉の違いを調整して会議をまとめる役割を主な仕事としていました。語学が好きでしたので、外交官にならないかと誘われましたが辞退した由です。
- ③ 私が小学生の頃にはノモンハン事件やゾルゲ事件があり、ソ

連が満州を敵視している事を感じました。なぜなら第5列(当時のスパイのこと)に注意というポスターを、小学生に画かせていた時代でしたから。

- ④ ベルリン五輪は、民族の祭典という映画で見ました。三段跳びやマラソンの孫選手の優勝も印象に残っていますが、ドイツの国歌は荘重な旋律で記憶に残っています。歌詞は世界に冠たるドイツ(ドイチュランド イーバーアレス イン デア ヴェルト) というもので、父から説明を聞いていました。野ばら(ハイデン・レースライン)と言う歌は、今でいうNHKで放送していました。歌詞は“わらべは見たり野中のバラ”というもので、中学生になってから合唱していました。
- ⑤ 私は陸軍幼年学校でもドイツ語を学ぶことになり、3年間の学習期間を与えられました。父からはドイツ語で手紙が送られてきたので、字引きを引きながら同期生と読み合わせて返事をまとめました。
- ⑥ 満鉄の後藤総裁が開いた、ハルピン学院という専門学院がありました。この学校へロシア語を学ぶ目的で陸軍から入学した人達のお世話をする事も、父の仕事の一部であった様です。戦後ユダヤ人の救済ビザで有名になった杉原千畝(リトアニア領事)も、ここの卒業生の由です。
- ⑦ 昭和28年厚生省から父は未復員戦病死の認定を受け、靖国神社に合祀されました。享年68才、埋葬地はスペルドルフスク州(モスクワ東方)とのことです。

「美深」と言う町があります。「ピウカ」は、そのアイヌ名です。かつては林業で栄えた町ですが、ここに徳島と板東で俘虜生活を送ったドイツ人が解放後、若いドイツ人の妻と住んでいたというのです。ドイツ人の名は「ユリウス・克蘭ツ (Julius Kranz)」で1961年に没しています。

この人が美深にやってきたのは、材木のせいです。松浦さんの話ですと、ことに道北と呼ばれる大雪山の北地域のナラなどの広葉樹は質が高く、ヨーロッパでは「銘木」として珍重されていました。その最大の理由は、夏は35度冬は零下35度という厳しい温度差にあるようです。夏は急激に成長し、冬は身を縮めて生き通すことで木目ははっきりした硬度の高い樹木が生まれるのです。ヨーロッパではこうした北国の広葉樹は家具に用いられるばかりでなく、特に最良の棺桶の素材とされ高値をよびました。そうした貴重品が安く手に入ることに目を付けたのがドイツのゲルトネル商会で、小樽に支社を置き良質の材木の獲得に努めました。そのために克蘭ツは、美深にやって来たのです。

1923年頃から4年間ほど松浦さんの父親が経営する製材工場と協力し合い、2組の新婚夫婦は助け合って北辺の地で過ごしました。しかし克蘭ツ夫人が火事を出し小樽に転勤、後に帰国したとのことである。

松浦光二さんは現在は札幌に住んでいますが、2002年にドイツから手紙が届きました。克蘭ツの末娘のエルケからのもので、何度か手紙をやり取りするうちにある依頼が来ました。父は結婚前に日本人女性と付き合っていて、男の子もいたと母から聞いた。血のつながった者として申し訳なく思っているが、どうかその義兄を探してもらえないかというのです。松浦さんが困ったのは昔小樽にいたというだけで、その日本人女性の名もその息子の名も判らないとのことです。かりに存命でも80過ぎになりましようが、何かの偶然で克蘭ツにつながる情報が得られればと期待しておられます。ひょんなことから、篠田和絵さんのドイツ人祖父のお墓が見つかった例もあります。何かご存知の方は、ぜひご連絡ください。

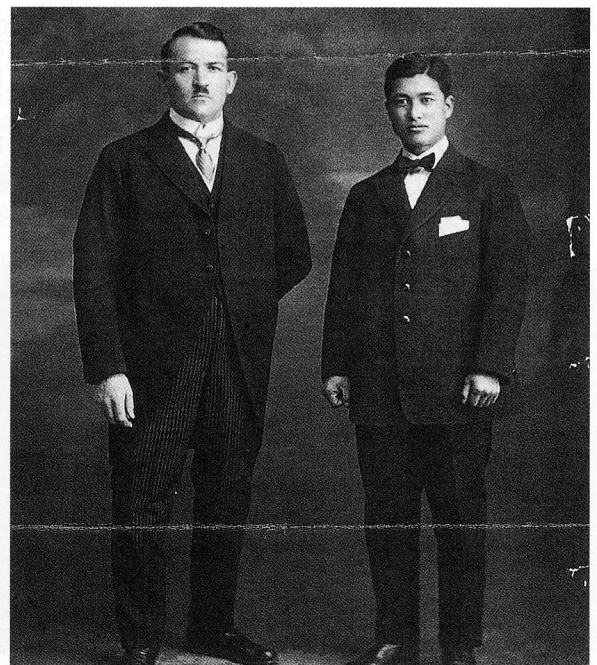
靖国神社事務所 御祭神調査の件(回答)	高木 康男 殿	高木 繁 命	一、階	級・準軍風特別未帰還者邦人
靖国第四三七号 平成十八年六月三十日			二、所 属 部	隊・浜江省哈爾濱市ハルビン特務機関
首標の件、この度御照会の御祭神につきまして、当神社資料に基づき左記の通り回答申し上げます。			三、死 歿 年 月 日	昭和二十八年四月三十日
			四、死 歿 場 所	ソビエト連邦スヤンドロフクス州アザン病
			五、死 歿 時 本 籍 地	兵庫県尼崎市西字荻ノ戸五三九ノ一
			六、死 歿 時 御 遺 族	(妻) 高木 りく
			七、合 記 年 月 日	昭和四十八年十月十七日

以上

高木大尉についての靖国神社からの回答

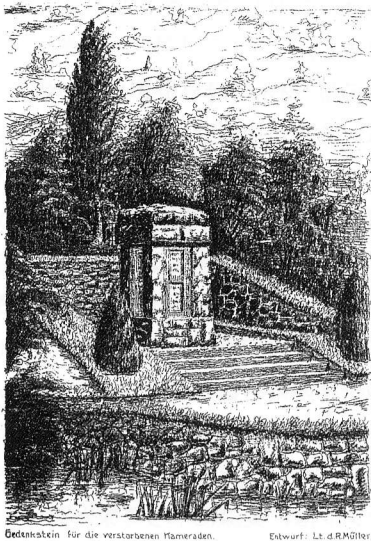
「ピウカに住んだドイツ人」(松浦光二さん) 紹介とお願い

9月に、札幌の松浦さんという方から48ページほどの手作りの印刷物が送られてきました。「ピウカに住んだドイツ人」と題し。「映画『バルトの楽園』に触発されて」という副題がついています。北海道の旭川から北へ100キロほど行ったところに、



ユリウス・克蘭ツと松浦周太郎 (大正11年12月25日撮影)

「ドイツ兵慰霊碑」県史跡指定に諮問、引き続き「ドイツ館所蔵資料」も県指定文化財に申請予定



ヴィルヘルム・ミュラー少尉による画

鳴門市はこれまで、板東俘虜収容所関連の施設・資料の文化財としての価値を後世に伝えることをめざし、いくつかの申請を行ってきました。それが実り2004年1月には、大麻比古神社境内の「ドイツ橋」とその標柱が「県史跡」に指定されました。またそれに続き2004年暮れには俘虜の下士官・兵卒用の兵舎だった「バラック」2棟と船本牧舎が国の「有形文化財」に登録され、そのうちの「バラック」1棟が、

本年7月に開設された「道の駅」の「物産館」として復元されました。

もちろん1919年8月に完成した「ドイツ兵慰霊碑」も申請をめぐしていましたが、諸般の事情からやや遅くなりましたがこのたび徳島県教委を通して、「県史跡」として県文化財保護審議会に諮問されることになりました。

なお鳴門市では、引き続きドイツ館所蔵の所内新聞『ディ・バラック』などの新聞・書籍などの文献資料、所長の軍服・俘虜制作の家具など、90年前の香りを伝える諸資料の「県文化財」指定をめざし、現在申請資料を作成中です。その過程で日独の資料の寄贈者の名前が明らかになるなど、さまざまな発見もありました。その詳細は申請承認の成果とともに、次号で紹介できることを楽しみにしています。

映画やロケ村の人気もあって、最近では慰霊碑を訪れる人も増えていますが、参道をもっときれいにとの意見も寄せられています。去る11月13日鳴門市シルバー人材センターの方々を中心にボランティアで、「ドイツ村公園を創る会」の会員も協力して草刈りをしました。今後も時期を見て続けたいと思います。ご協力下さい。



慰霊碑への参道を草刈りしているようす

今後の行事予定

11月18日～12月24日	ドイツのクリスマスマーケット展
12月3日	ドイツ館のクリスマス会
10日	「ドイツ館友の会」クリスマス会
16日	マルディグラ
23日	角泰志クラリネットリサイタル2006年
1月3日～28日	板東俘虜収容所の日本人寄贈品・所蔵品展
1月6日	ピアノコンサート（予定）
12日～14日	子ども県展巡回展
2月3日～25日	ドイツ木版画ワークショップ作品展
11日	田中貴志ピアノコンサート
3月3日～25日	板東俘虜収容所新聞『ディ・バラック』の世界（予定）
17日	県出身の東京芸大在学生のピアノコンサート

『ディ・バラック』および『帰国航』の「ドイツ語版」がCD化

『ディ・バラック』の第1巻から第3巻までと6冊の月刊分、それに帰国の船内で出された『帰国航』の「ドイツ語版」が入ったCDができました。一枚3,000円です。ご活用下さい。

『「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」研究第4号』刊行

全国『研究誌』の「第4号」ができました。ご購入ください。なお、不足しておりました「創刊号」と「第2号」も刷り増しました。いずれも1部500円です。

編集後記

今回は関係者などのご協力をえて、高木繁副所長の「ミニ特集」を組んで見ました。初めて聞くことなどもあるかと思えます。お楽しみ下さい。札幌の松浦さんからのユリウス・クラントツについてもそうですが、高木さんにつきましてもご存知の情報がございましたらぜひお知らせ下さい。

ロケ村が半年で13万人を越えるほどの人気ですので、ドイツ館の入館者も10月で昨年の2倍を超えました。県外からの方も多く嬉しい悲鳴です。いっその進展を期待しています。（田村）